

ごはんが運ぶ幸せの香り

白岡市立篠津中学校 一年
石川 碧 嶺

目が覚めて下に降りていき、部屋中に炊きたてのご飯の香りが立ち込めている朝。

「よし！ 今日頑張るぞ！」

という気持ちになります。

我が家は間違いなくごはん党一家です。たまに朝食にパンが食卓に並ぶ時もありますが、毎日と言ってよい程朝食はまっ白いごはんが出てきます。朝の忙しい時間にもかかわらず、母は魚を焼いてくれたり、お味噌汁を用意してくれて、日本的な朝食を味わっています。子供の頃からごはんをたくさんかむと甘くなるといわれていたのでよくかんで食べる癖がついています。確かに甘く感じます。

一番おいしいごはんは、僕の家にあるル・クルーゼという鍋で炊いたごはんです。その鍋で炊くごはんは最高においしいです。子供の僕でもごはんのつや、お米が一粒一粒立っている様子、甘みが感じられる程おいしく炊けるのです。同じお米なのになぜ炊くものによって味が変わるのか不思議です。

ごはんにまつわる思い出でぼくは忘れられないものがあります。それはおにぎりです。小学校の時、ぼくは少年野球チームに所属していました。そのチームのお弁当はおにぎりのみでした。チームの名前からとった「ファイターズ弁当」という名前がついていましたが、弁当ではなくおにぎりで、おかずが必要なれば具としてウインナーやから揚げを入れて、とにかくおにぎりの形にして持って行く決まりとなっていました。高学年になって、週末は試合が増えて、弁当持ちの回数が増えていき、毎週末のお昼ごはんはおにぎりを食べていたような気がします。小学生まで、すでに人が一生の内食べるであろうおにぎりの数を食べ尽くした感じがする程、土・日曜日のお昼ごはんはおにぎりを食べていたので、少年野球チームを卒団してからもうおにぎりは食べなくて済むと思っただけでした。

中学生になり部活で弁当を持っていくことになりおにぎりを食べるのがなくなりました。弁当箱にためてある白いごはんが新鮮で、正直なところおにぎりの存在を忘れていました。ところが先日、母の握ったおにぎりを食べたその時、小学校の時のなつかしさが込み上げてきました。野球チームの仲間と一緒に過ごしたことや、試合で負けた時に食べたおにぎりのくやしさがこもった味や勝った時に食べたおにぎりは最高においしかったことなど様々な場面でのいろいろな思い出がよみがえってきました。

「またおにぎりかー。」

と思つて食べていた僕の裏では、母が朝早く起きて

「今日頑張れ！」

という気持ちを込めて、一つ一つ握ってくれていたから僕の心の中にたくさんの思い出が残っていたのかもしれません。そして母の手によって握られているおにぎりには、母の気持ちと、何よりも僕への愛情が込められているのだと分かったような気がしました。弁当に代わってからもそうですが、あまり感謝の気持ちを伝えていないので、今度まとめて感謝の気持ちを野球のプレーで伝えようと思います。

最近、我が家のご飯を炊く量がどんどん増えてきているようです。以前は三合炊けば家族四人で食べても残る程だったのですが、四合五合、お弁当の時は六合も炊いているそうです。母が

「最近お米の減りが早くて、なんだかしよっちゅうお米を買いに行っているような気がするんだけど。」とよく言っていますが、どこか嬉しそうな表情をしている気がします。

朝起きた時に部屋中に立ち込める炊きたてのごはんの香りは、我が家に幸せを運んでくれる特別な香りなのかもしれません。